

「薬剤師 役割大きい」

震災派遣の県立大教員5人

フィジカル アセスメント 教育の充実図る

薬剤師として、東日本大震災の被災地で医療支援に当たった県立大薬学部の教員5人が7日、静岡市駿河区の同大で活動を振り返った。日常的に処方、服用されている薬が津波で流された被災地で、「代替薬を的確に投与する薬剤師の役割は大きい」と口をそろえた。



調剤などを行う静岡県立大の教員(右手前)ら

3月25日、宮城県女川町の女川町立病院

教員らは3月23日から4月5日にかけて、1人あたり4〜14日間、宮城県石巻市や女川町、福島県相馬市でそれぞれ活動した。病院に届く医薬品を成分ごとに仕分けしたり、医師と避難所を回って薬を投与したりした。医師は自分の専門外の患者も診るため、処方する薬の種類や量も助言したという。

リーダーの賀川義之教授(51)は、薬剤師も聴診器や血圧計を使って患者の健康状態を診る「フィジカルアセスメント」を行う必要性を強調した。ストレスが原因で、血圧は平常より上がっていた

被災者が自立し、がれきりほりこいで、ぜんそくのよくな症状が現れた人もいる現状も紹介した。県立大薬学部では昨年「フィジカルアセスメント」の講義を取り入れていた。賀川教授らは「こうした教育をより充実させる。東海地震を念頭に、被災地での薬剤師のニーズを学生に伝えた」と話した。電話やインターネットが復旧しても必要な薬が必要な場所に行き届いていない実情にも言及し、「医薬品の集積所の在庫状況がインターネットなどで随時確認できるシステムが必要」と指摘した。